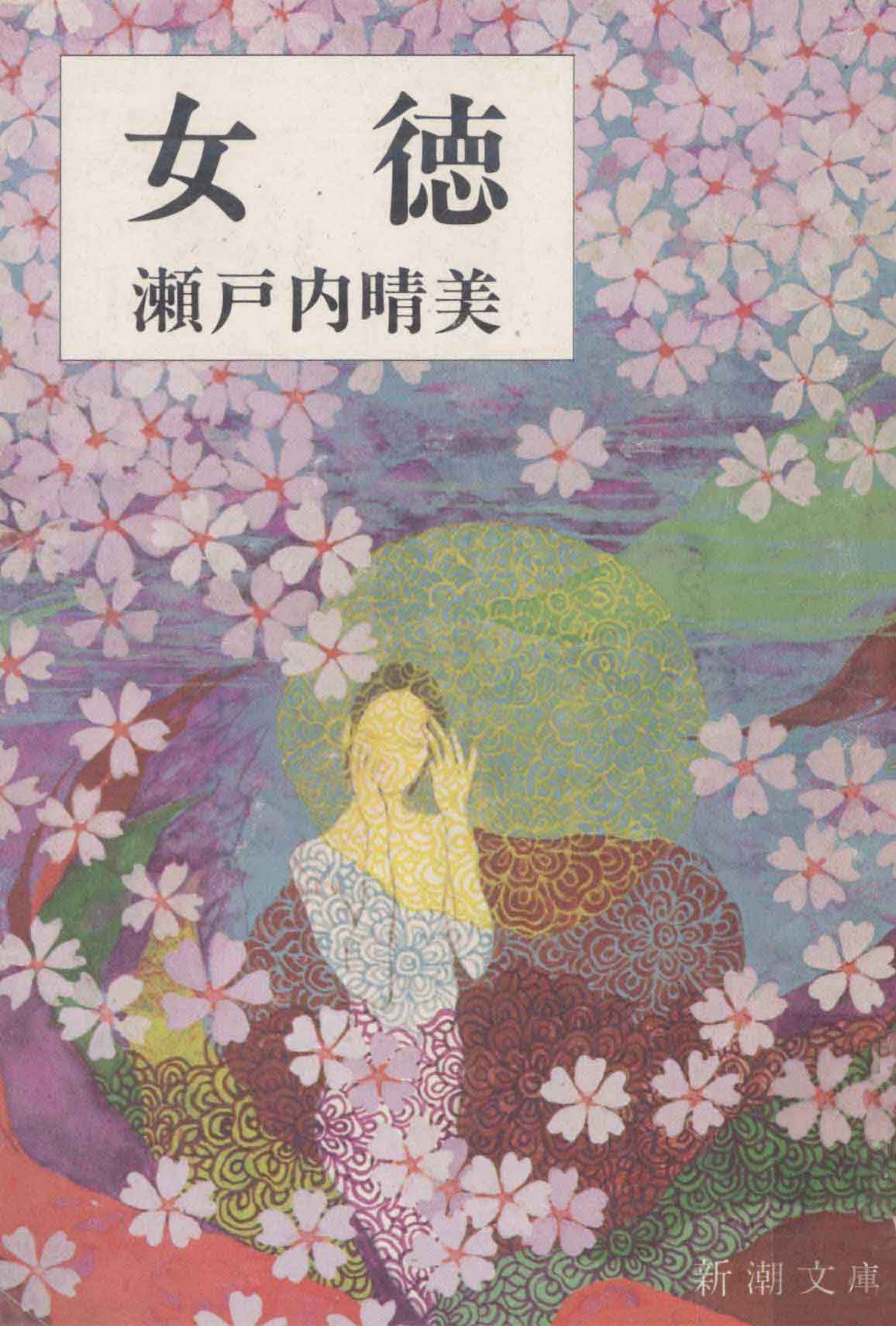


女 徳

瀬戸内晴美



新潮文庫

じよ
女

とく
徳

新潮文庫

せ - 2 - 2



昭和四十三年五月三十日 発行
昭和六十一年十一月十五日 四十刷

著 者 瀬戸内晴美

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六―五一―一
編集部(〇三)二六六―五四四〇

振替 東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

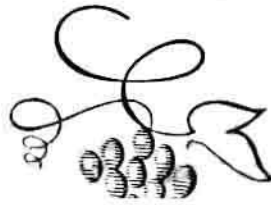
© Harumi Setouchi 1963 Printed in Japan

新潮文庫

女

徳

瀬戸内晴美 著



新潮社版

1819

女

德

黒い蝶

徳

燃えたつ新緑を背景にした渡月橋が、フロントグラスの中に、絵葉書のようにおさまってきたころから、車窓をうつ細い雨脚が、またひとときわ激しくなった。

朝から霧のような五月雨が降りしきっている天候のせいか、さすがに今日の嵐山に人影は少い。それでも観光バスの客らしい老女の一団が、なりふりかまわず着物の裾をからげて、ビニールの大ふろしきに二人ずつ頭をよせあい、渡月橋をかけ足で渡っていた。

桂川の清流は、雨脚に濛々とかすんでいる。上流に兩岸からせまった嵐山の嫩葉は雨に洗われて、すき透るように鮮烈なエメラルドグリーンの炎になって、鈍色の空に燃えあがっていた。嵐峡の舟遊びは、季節は問わないけれど、小雨が煙る時が最高だと、何かの案内書でみたことを柴岡亮子はハイヤーの中で思い出していた。

女

「あいにくどすなあ」

びんに白髪のまじる運転手が、気の毒そうに亮子に雨の悔みをいう。

「嵯峨野はどこへ？」

「祇王寺まで……門のそばまで車入りますか」

「へえ、お天気の日なら、いつでも門ぎわに二台や三台の車はとまっています」
「そんなに有名なところ？」

「庵主^{あんじゅ}さんが、ああいうお人やさかい」

「いつでも逢^あえるのかしら」

「へえ、たいていお居やすうで。庵主さんがテレビの『女の椅子』に出やはったのござらんどしたか」

「それが、み損^{そこな}ったのよ。今でもきれいな人ですってね」

「へえ、そらもう。せやけど、カメラはええレンズほど、はつきり年を映しだつしよりますやろ、実物の方がずうつとよろしゅうおす」

秦野^{はたの}洋三と、同じことを云うと、亮子は運転手のことばに微笑した。洛西^{らくせい}嵯峨野の祇王寺に出家遁世^{とんせい}して、行い澄ましている智蓮尼^{ちれんに}の話を、亮子に聞かせたのが洋三だった。

テレビ『女の椅子』は、洋三の勤務先の、東洋テレビのヒット番組で、洋三はその番組担当のディレクターだった。各界の女流の「女の一生」的なものを、十五分番組で観せるのだから、文字通り、一人の女の生涯のダイジェストにすぎない。けれどもその番組は、五十回を越えるあたりから、次第に決定的な人気が出て、ぬけ目のない映画会社が、同名の映画を製作するほど、茶の間の人気番組になっている。今ではすでに百回近くになっていた。

女の一生を捕えようというのだから、選ばれる出演者は、いきおいドラマティックな過去を持つことが、条件の大切な要素にあげられていた。

仕事熱心な洋三は、次第に出演者の種がつきる頃から益々意欲を燃やしはじめ、思いがけないところから、思いがけない女性を探しだしてきて、番組の人気を衰えさせないようにしていた。

中でも、嵯峨野から、智蓮尼を上京させ、局へ迎えるまでの苦心は大抵ではなかったらしく、

それだけに、予期以上の反響があつて、ヒットしたので気をよくしていた。

亮子が聞いたのは、いつものように、洋三と、お濠端はりまたの小さなホテルで快樂をわけあつた夜の、ベッドの中であつた。

六十七歳という智蓮尼の年齢を聞き、亮子は洋三の胸の中で笑いだした。

「いくら、あなたが年増趣味だつて、六十七歳じゃあね」

洋三は、少年の頃から、年上の女にしか惹かれられないのだと口癖にいつていた。それも洋三が年上の女を口説きおとす手の内の一つだと、見ぬいていながら、亮子自身、洋三のその手にのせられた形で、いつのまにか、月に三、四度のふたりの夜を持つようになって、もう二年近くすぎている。

徳

女

「六十七だつて七十だつていいさ、あの年で、あれだけの色っぽさを保つていられるなんて、もう芸の境地だな。女形おやまの色気が女以上なのと共通な、一種の様式化された色気のエッセンスみたいなものが漂うんだよ」

「大したイカれ方なこと」

「そうさ、俺、あの庵主さんとなら一ぺんくらい寝てみたいもんだ」

「いやらしい」

亮子とはことばよりす速く、毛布の中で洋三の向うずねを蹴けった。洋三は蹴られた足で、亮子のしなやかな下肢かじを巻きこみながら、まだ智蓮尼の話をやめなかった。そして結局、亮子は洋三のたくらみ通り、刺戟しげき的な尼僧の話に、深く鋭い二度めの快樂の波を軀からだの芯しんから呼び覚まされ、なめらかな波のうねりの底にきりきり溺れおぼれこまされていった。

今朝、木屋町の旅館三輪の家の二階で目覚め、雨になっていることに気づいた時も、亮子はまだ、祇王寺を訪れてみようなどとは思ひもかけていなかった。

大阪のデパートで展^{ひら}かれてゐる『ゑり聡』の展示会に、亮子も新作のデザインの着物を十点ほど出しているので、昨日日航で下阪して、顔を出したあと、文楽をのぞいたりして京都へ着いたのは、夜も更けてからであった。室町の刷^かり鹿の子の名工の許^{もと}に頼^{たの}みである自分のデザインの振^お袖の進行程度を、たしかめてみさえしたら、今度の京都での予定はなかった。

目覚めてすぐ、室町に電話をすると、珍しく、出不精の老工が四国へ金比羅詣^{こんびらまい}りに出かけて留守だという。

徳

思いがけず、予定のなくなった半日を、どうして過そうかと、賀茂川に面した硝子戸^{ガラス}を細目にあけたとたん、高まった川音といっしょに、はらっと、黒い揚翅蝶^{あげはちょう}のかげが、亮子の頬^ほをかすめ、部屋の中に舞いこんできた。

女

雨に濡れた蝶の翅^{はね}は深い茄子紺色に光って、鋭い鋏^{はさみ}できりぬいたようなあざやかな翅のきりこみのもとに花粉をまぶしたような黄の斑^{ふく}が滲^{にじ}んでいた。

蝶は、薄暗い部屋の中をゆるやかに二、三度舞ったあと、床の間の白芍薬^{しやくやく}が投げいれられた李^り朝の壺^{つぼ}の白磁の肌のふくらみに、そっと翅をやすめた。

ゆるい吐息をはいているような、あるかなしかの蝶の翅のゆらめきに、ふとなまめかしいものを感じ、亮子はもう、きものの図柄に結びつける光った目を凝らしていた。その時、洋三に聞いた智蓮尼の話^{あさ}を鮮やかに思いだしたのだった。

『女の椅子』の撮影のため、洋三のスタッフたちが、智蓮尼の日常生活をカメラに収めようと祇

王寺を訪れた時のことだ。六十七歳の老尼は、その日のため、突貫治療で歯をすっかり入れかえて待っていた。

「テレビを拝見いたしておりますと、お話しになる人様の口もとがまことに目立つものだ、かねがね思っております——たくさんのお方のお目に老醜をさらすのでございますから、せめて醜くなった口もとでもなおして出演させていただきたいと思ひまして」

小粒な合成樹脂の義歯が入った唇元をほころばせて、老尼は洋三ひとりにそつと打ちあけた。撮影時間七分間のフィルムの中で、老尼は、衣裳を五度着かえた。撮ってしまえば、それは、一様に、白と黒の変りばえもしない比丘尼のきまりの衣姿でしかないのだったが、白い小袖は一枚毎に、地質も織こみの模様もすべてちがっていた。衣の色も墨染から紫の濃淡まで、一枚として同じものはなかった。

好色一代女という異名をとったほど、嬌名をうたわれた女の中には、左棲をとった時代のサービス精神と心意気が、世を捨てた草庵生活三十有余年を経た今も、骨の髄にからみついているようであった。

カメラマンが、レンズの視点を定めるため、草庵のあちこちへ目を移している間、智蓮尼は、縁側に衣の袖をかきあわせ、ひっそりと坐って待っていた。

秋のはじめの澄明な陽光が、こぢんまりした庭にふりそそぎ、庭樹の翠も苔の青も、ひすい色にすぎ透って輝いていた。

みどり色に染った陽光は老尼の白い片頬にもうす青い翳をいろどっていた。たくまずして出来ている淡墨の名画のような構図に、洋三が思わず、カメラマンの肩を叩いた時だった。

庭の植込みの中から舞いあがった黒い蝶のかげが、はらはらと縁側に近づいてきた。異様なほど大きな黒揚翅はよく見ると二羽が翅を合せてつがっているままだった。

無心に庭にそそいでいたと見えた老尼の目が、その時、蝶のかげを追ってみひらかれた。

洋三は、あっと息をのんで軀をこわばらせた。

智蓮尼の切れ長の目が、異様に熱っぽくきらめき、またたきもせず、重たげに空中に止ってふるえているつがいの蝶の上に凝らされているのを見とめたのだ。

男のために小指を切ったという老尼の前身の、ありあまる情火の名残りが墨染の衣につつまれたきしゃやな老尼の身うちから、なお青白い炎をふきあげているような幻影に、洋三はかるい目まいを覚えた。

徳

洋三からその光景を熱っぽい口調で聞かされた時、亮子は、

「つきすぎていて、こちたしって感じね」

女

と憎まれ口をきいた。けれども洋三の描いてみせた尼寺の縁先の、老尼と蝶の図柄は、見たことのある名画のように、鮮明に脳裡のうりに焼きついた。

白磁の肌から離れ、黒い蝶は、ゆらりと、芍薬の花芯の中に身を沈めていった。

亮子は上ってきた女中に昼すぎに車を頼んでくれるようにいった。

「今日はどちらへおこしやす」

「嵯峨野あたりまで」

「雨の中をどすか、ごくろうさんなことどすなあ」

祇王寺へ行くとは、つい云いそびれてしまった。

食事の間に、気がつく、黒い蝶は部屋から消えていた。

車は渡月橋をわたり名刹天龍寺の前をすぎてゆく。遊覧バスがゆきかうアスファルト道を三分も走り、左へ曲ると、急に、あたりは寂然としてくる。道も、車が一台ようやく通れるほどの細道になる。

徳 両側の家は、軒が低く、間口が狭い紅殻ぬりの格子の入った純京風の家並となり、それからの家並もたちまちつきると、白い寺塀の土壁と、おびただしい緑にあふれ、車はいきなり碧い海底になげこまれたような感じになった。

この辺りから小倉山一带にかけての嵯峨野は、一木一草まで平家物語の世界である。

雨は小倉山の新緑をとかし、竹林の碧を煙らし、車はますます厚い深い水の層をおしわけながら海底をすすんでいくような感じであった。

女 藤原定家が晩年の静謐を求めて引きこもったという小倉山荘のあとが厭離庵になっている。

厭離庵と二尊院にはさまれた阻道ぞいに更にすすむと、往生院の遺蹟の名残りといわれる滝口寺や、祇王寺が緑の中にひっそりと沈んでいる筈であった。

11 「入道相国、一天三海をたなごころのうちににぎりたまひし間、世のそしりをもはばからず、人の嘲りをもかへり見ず、不思議の事のみし給へり。たとへばその比都に聞えたる白拍子の上手、祇王祇女とて兄弟あり、とちといふ白拍子が娘なり。姉の祇王を入道相国最愛せられければ、これによって妹の祇女をも世の人もてなす事なのめならず。母とちにもよき屋つくつてとらせ、毎月百石百貫をおくらせければ、家内高貴してたのしき事なのめならず……」

の文章ではじまる、平家物語の中の祇王の章が、流布本にだけ伝えられた物語で、定本とされる覚一本には全くかげもみえないことを亮子は今朝、三輪の家の高校生の娘の本棚からぬいてきた岩波文庫の「平家物語」ではじめて知った。

女学生の頃、読んだきりの、祇王と仏の物語も、三十歳を越えた亮子が今読みかえしてみれば、意外に生ぐさい人生の業や、女の嫉妬がからみあっていて、ただあわれ深い発心説話といっただけのものでもなかった。

五十男の僧形の清盛をめぐって、二十歳と十六歳の白拍子が愛を争う話は、現実の身のまわりにも聞くようなまなましさがあった。

自分の美貌と才におごって、清盛の館に单身デモンストレーションをしにいく十六歳の白拍子仏の姿は、ミス何々コンテストに、せいっぱい肌をあらわした水着姿で、登場する、現代ローティーン娘気質と相通じているし、飼犬に手をかまれるような憂目にあって泣く善良な気の弱い女の運命も、見まわすところどころがっているようであった。

「かくて春過ぎ夏闌けぬ、秋の初風吹きぬれば、星合の空をながめつつ、天のと渡る梶の葉に思ふ事かく比なれや。夕日の影の西の端に隠るるを見ても、日の入給ふ所は西方浄土にてあんなり。いつか我等も彼処に生れて物を思はでずさんずらんと、かかるにつけても過ぎにし方の憂き事ども思ひ続けて、ただ尽せぬ物は涙なり……」

若い仏に清盛の寵を一挙に奪われた祇王一家が、世をはかなんでひきこもった庵に、やがて、仏も清盛の館をぬけだして来て加わる。

祇王二十歳、妹の祇女十九歳、仏十七歳、祇王の母とち四十五歳という四人の女が、髪こそお

ろしても、まだ血汐ちしおの熱い女の身をせまい草庵によせあつて暮した歲月は、果して、清らかです
くいのがあったものだろうか――。

亮子がそんなことを思いうかべている間に、車は、山麓さんろくの竹林のかけにとまっていた。

あずき色のベンツが一台、すでに樹かげに止っていた。

雨はいつか小ぶりになり、たち上るもやが狩野派かののうの絵のような霞雲かすみぐもになつて小倉山の裾を飾つ
ている。

そこからは車は入らなかった。苔こけと雑草が敷物のようにおおっているせいか、あれほどの雨の
あとなのに、道は草履を汚よごさない。

朽ちかけた屋根の形ばかりの門をくぐると、楓かえでと紅葉もみじの木をめだつ庭の向うに、いかにも女性
的な親しみやすい草庵の屋根が見えた。

門の左かたに、赤地に白くそめぬいた「わらびもち」の旗がさがり、茶店のよしずがかかつて
いた。

緋毛氈ひもうせんをしいた牀机しょうぎに、若い二人づれがももひきのように細いズボンをはいたハイキング姿
で、わらびもちの皿をかかえこんでいた。

「お茶、もういっぱい、さしあげまっか」

グレイのズボンに、うす茶の開衿かいぎんシャツをつけたがっちりした骨組の見るからに丈夫そうな男
が、庵と茶店の間を、気ぜわしそうにあちこちしながら客の応接に当たっていた。

初老に見えるけれど、陽やけした小麦色の皮膚は、艶々つやつやして、シャツの半袖の下から出ている
腕は、筋肉が筋ばって盛り上っていた。

声はあたりにひびきわたるように大きかった。

「ま、雨やどりしておいきやす」

粹筋いさだじの女らしい二人づれと、これはいかにも堅気の奥様ふうの三人づれが、せまい草庵の軒下で右往左往していた。

塵ちりひとつなく掃き清められた玄関の軒下のあか桶おけに、紫色の都忘れの一束が無造作になげこまれている。

徳

男は前歯がすっかりなくなっているせいか、四角く骨ばった、いかつい顔がどこか無邪気に口もとで崩くずれていて、愛嬌あいぎょうのある親しみやすい表情をしている。

温泉宿の番頭のような愛想のよさと、まめまめしさが目だつ。閑寂そのものの、きゃしゃな草庵には、どこか似つかわしくない風情ふうぜいがしないでもない。

女

この男が、洋三のいつていた智蓮尼の芸者時代からの崇拜者で、その晩年を献身的に智蓮尼の傍そばで奉仕しているという人物なのかと、亮子は茶店の前のあたりで立ちどまり、見とれていた。

それは緑の小倉山を背景に、まるで舞台の書割かきわりのようにこぢんまりと、まとまった風景であった。

その時、庵の舞台なら上手かみてと呼ぶべき物かげから、人影がすつとあらわれた。亮子の目の前で、紫の骨細の蛇じやの目の傘が、ふわっと開き、斜めにかかげられた。

その下に少女のように小柄できゃしゃな墨染の尼僧の姿が、すんなりと片足をひいて立っていた。

青々とそりあげた形のいい頭の下に、文楽の人形のように、照りのある白い古風な瓜実顔うりざねが、

かしげられていた。

傘のかけから空を見あげた切長の棗形の目が、これも人形の目のように、名刀でくりぬいたさわやかさで、やや吊りあがってついていた。

一分のすきもない優美な尼僧の立ち姿に、亮子は目をはじかれたように息をつめた。

祇王寺の庵主片山智蓮尼、その人にちがいはなかった。

傘のかけから空を見上げた尼僧は、七分開きの傘をそのまま斜めに持ちあげて、小腰をかため、つつうと亮子の前を通りすぎた。

花道を行く名優のようにすきのない動作と後姿に、踊りできたえた型が、優美にきまっていた。

「あ、もし」

亮子は声をかけていた。尼僧の美しい動きにわれにもあらず声が誘いだされてしまったという感じであった。

尼僧がふりむいた。薄紫の傘の色が白い顔にやわらかな翳をおとしている。見張った尼僧の目に、かすかな愕きの色がさしているのを亮子は見のがさなかった。

こういう人の目ざしに亮子は馴れていた。

亮子の美しさと、凝った衣裳に目を奪われる同性の目であった。男の目の色はまたちがっている。

今日の亮子は、ちょっと見には久留米絣のように見える藍地に白水玉を織りださせた結城の単衣に、旧い印度更紗の帯を胸底にゆるくまいていた。

派手な色は一筋もないのに、くすんだ地味さに包まれた亮子のほっそりした姿は、すぎ透るよ